

1P143

病気の子どものケアを主題にした書籍における便秘に関する記載内容の分析

小泉 麗、大屋 晴子

昭和大学保健医療学部看護学科

【目的】 病気の子どものケアを主題にした保護者向け書籍における便秘の予防・ケア（便秘ケア）に関する記載内容を明らかにし、子どもの便秘ケアにおいて保護者が書籍を活用する上での課題を検討する。

【方法】

国立国会図書館サーチを用いて2014~2021年1月に出版された病気の子どものケアを主題にした書籍（雑誌・ムック除く）を検索した。専門職向け書籍及び児童書を除外し、目次に便秘に関連する項目がある9件を分析対象とした。目次及び索引から便秘ケアに関する記載頁を検索し、記載内容の特性に基づきサブカテゴリー化、カテゴリー化を行った。倫理的配慮として、分析用の作表においては著者の記述をそのまま引用し、主旨や意図を損なうことなく正確に反映させた。

【結果】

出版年は2014年1件、2015年1件、2017年1件、2018年3件、2019年2件、2021年1件であった。全て医師による著作または監修、協力があつた。記載内容の分析結果：[便秘の病態]として<便秘のメカニズム><便秘の原因><便秘の定義・症状>、[受診の判断]として<受診前の観察項目><受診のタイミング>、[薬物療法]として<浣腸><浣腸以外の薬物療法>、[生活・排便習慣の支援]として<排便パターン・排便状態の確認><規則的な生活・排便習慣><綿棒刺激><子どものストレス>、[食事の支援]として<水分摂取><食事内容><糖質下剤>、[運動の促進]として<腹部マッサージ><運動の内容・量>を抽出した。このうち、<便秘の定義・症状><受診のタイミング><浣腸><綿棒刺激><子どものストレス><水分摂取><食事内容><腹部マッサージ><運動の量・内容>に関しては、書籍により説明の相違があつた。

【考察】

1. 書籍には子どもの便秘の病態、治療、ホームケアの具体的な記載があり、保護者が養育に活用できるよう配慮されていた。しかし、書籍により説明に相違があり保護者の混乱を招くことも危惧された。定期健診やかかりつけ医受診の機会を活用し保護者が得ている情報の整理・解釈を支援し個別性のある便秘ケアを行う必要がある。2. トイレトレーニング期や通学開始を期に便秘を発症した子どもに焦点化したケアの内容は記載されていなかった。幼児期以降に便秘を発症した子どもの便秘ケアに関して、トイレトレーニングの考え方や子どもへの健康教育に関する情報を発信することも必要である。

1P144

新しい生活様式下における幼児の感染予防行動および日常生活の変化 ―新型コロナウイルス感染症の流行前との比較―

遠藤 数江、野村 智実、来生 奈巳子

国立看護大学校

【緒言】

COVID-19 (Coronavirus disease 2019) の流行による、感染予防に努める新しい生活様式下において、子どもの日常生活に何らかの変化が生じていることが考えられる。そこで、本研究の目的として、幼児期の子どもの感染予防行動および日常生活状況の変化を明らかにすることとした。

【方法】

A市とその近隣に在住する0～6歳の子どもをもつ母親を対象とし、匿名自己入力式web調査を行った。子どもの年齢、手洗いやマスクの着用などの感染予防行動、COVID-19流行前と比較した子どもの日常生活の状況の変化について、自作の質問項目で回答を求めた。子どもが複数名いる場合、子どもごとに回答を求めた。本研究では社会生活を送るうえで必要な基本的能力を獲得する時期である1～6歳の子どもの状況について、1～3歳を幼児前期群、4～6歳を幼児後期群として比較検討を行った。各変数の差の検定では、カイ二乗検定、残差分析を行った。倫理的配慮として、所属機関の倫理審査委員会にて承認を得た上で実施した。

【結果】

母親113名から幼児162名分の回答を得た。子どもの平均年齢は3.6±1.6歳、幼児前期群71名（43.8%）、幼児後期群91名（56.2%）であった。幼児後期群で外出時にマスクを毎回着用する（ $p < .01$ ）、外出後の手洗いを必ずする（ $p = .02$ ）子どもが有意に多かった。日常的な外出で子どもと一緒に連れていく頻度が減っていると回答したのは幼児前期群で64.3%、幼児後期群で76.4%であった。余暇を目的とした外出の頻度が減っていると回答したのは、幼児前期群で85.7%、幼児後期群で84.3%であった。COVID-19流行前と比べ、食事時間、菓子摂取量、清涼飲料水の摂取量などは「変わらない」との回答が多かった。外遊びの時間は、幼児前期群で46.5%、幼児後期群で61.5%が減ったと回答した。テレビやDVDの視聴時間は両群とも50%以上が増えたと回答し、スマートフォンやゲーム機等の使用時間は、幼児前期群で45.7%、幼児後期群で64.7%が増えたと回答した。

【考察】

幼児後期群の方が、感染予防行動がとれており、これは日常生活行動が自立してくる時期と一致する。幼児期前期の感染予防行動について、年齢に合った支援とともに親がストレスを高めないように支援する必要がある。